

論文

語り方の視点構成

——内的独白文の場合——

山本雅子

要旨

内的独白文は、言語主体の事態把握の観点から捉えると、トラジェクターとランドマークの反転を反映する。言語主体は、客体的概念内容のなかの動詞によってプロファイルされるトラジェクターとしての役割を放棄し、自分自身を提示させないランドマークとなる。このような、言語化されない体験主体がランドマークとなり、その思考内容をトラジェクターにすることにより、そこに表出する事態は、体験主体が極めて主体的に概念化したとする事態となる。こうしたトラジェクターとランドマークの反転を反映する構図を構築するのが、自己中心的視点構成である。日本語では、自己中心視点構成は、時制形式とされる「 ϕ プロセス／ル」「プロセス／テイル」という2つの言語形式によって反映される。

キーワード：トラジェクターとランドマーク 時制形式の認知的意味
標準的視点構成と自己中心的視点構成

1 はじめに

日本語の小説では、地の文の文末辞がタ形、ル形で書き分けられることは周知のところである。タ形、ル形は、一般には時制形式と呼ばれ、時制を示すことをその機能とするとされている。そのため、小説の文末辞においても、これらの形式はあくまでも時制を意味するものであり、タ形は過去を、ル形は現在を表すと主張する研究も多々見られる。しかし、この

過去とは誰にとっての過去なのだろうか。同様に現在とは誰にとっての現在なのだろうか。さらに、過去、現在を表すのであれば、未来小説やSFなどが何故成立し得るのだろうか。また、他方では、時制という意味では説明が困難なことを認めてか、タ形に完了の意味を担わせる研究も多々見られる。ただし、この場合には、対を成すル形が未完了の意味を担うことはないという不思議がある。

タ形、ル形のはたらきについては、こういった、形式が反映する意味機能を曖昧にしたまま、さまざまな主張が飛び交っているという研究上の現状を受けて、本稿では、言語を認知プロセスの反映と見なす認知言語学のアプローチにより、小説の語りにおける内的独白を表示する文の意味機能を、視点構成の観点から考察し、タ形、ル形が対象にたいする言語主体の視点構成を表示するマーカーとして機能していることを説明する。

2 トラジェクターとランドマークの反転

2.1 内的独白文

概念化モデルにおいて概念化の対称となる最も典型的なタイプの事態は、動作主 (AG) が被動作主 (PAT) に何らかの働きかけを行い、それによって被動作主に何らかの状態変化が生じるという、エネルギー伝達を介した有界的な事態である。この種の事態では、動作主—被動作主の相互作用はオンステージに描かれ、動作主はトラジェクター (tr)、被動作主はランドマーク (lm) としてプロファイルされる。トラジェクターとランドマークの関係は、際立ちの非対称性を示す関係であり、ある関係がプロファイルされると、関係性を有する参加者に程度のさまざまな際立ちが与えられる。最も際立っている参加者は、トラジェクターと呼ばれ、ある場に位置づけられたり、評価されたり、記述される対象として解釈される。2番目に際立っている参加者はランドマークと呼ばれる。

次の例文を見てみよう。

(01) 戸口に立って空を見上げた。朝の陽ざしの、赤いくまどりで、やっと見分けられる^①。遠慮がちな綿毛の雲……とうてい、雨を望めるような空模様ではない^②。吐く息ごとに、体の水分が失われていくようだ^③。「一体、どうするつもりなんだ！おれを殺す気か！」▼女は、相変わらず、黙ってふるえつづけるばかりだ^④。おそらく、何も彼も、知りぬいた上でのことだったのだろう^⑤。要するに、被害者面をした、共犯者だったのだ^⑥。苦しむがいい^⑦！……それぐらいの苦しみは、当然のむくいだ^⑧。

しかし、その苦しみが、部落の奴等に伝わってくれるのでなければ、なんの役にも立ちはしない^⑨。しかも、伝わってくれるという保証はどこにもないのだ^⑩。それど

ころか、必要とあれば、女を犠牲にしてはばからないことも、じゅうぶんに考えられる^⑩。女がおびえているのも、そのせいかもしれない^⑪。逃げ道だと思って、身をおどらせた柵の隙間が、実は檻の入り口にすぎないことに、やっと気づいた獣……何度か鼻面をぶつけて、金魚鉢のガラスが抜けられない壁であることを、はじめて知った魚……ふたたび、素手でほうり出されてしまったのだ^[13]。いま、武器を握っているのは、彼らの側なのである^[14]。(『砂の女』新潮社2003: 137)

冒頭文は、「(男) 戸口に立って空を見上げた。」というように、他動詞構文ではないものの、動作主をトラジェクターとした文である。語り手は、語り世界の外側から「(男)」の動作を描出している。こういった登場人物の動作の描出は語りにおける基本的な描出である。問題は、続く14個の文である。これら14個の文の文末の形式とその意味を見ると次のようである。

- ① 「見分けられる」：可能形式によって示される判断
- ② 「ない」：否定形式によって示される判断
- ③ 「ようだ」：推量形式によって示される判断
- ④ 「ばかりだ」：限定を意味する名詞形式によって示される判断
- ⑤ 「だろう」：推量形式によって示される判断
- 【6】 「のだ」：「のだ」形式によって示される披瀝
- ⑦ 「いい」：形容詞形式形式によって示される判断
- ⑧ 「むくいだ」：断定形式によって示される判断
- ⑨ 「ない」：否定形式によって示される判断
- 【10】 「のだ」：「のだ」形式によって示される披瀝
- ⑪ 「考えられる」：可能形式によって示される判断
- ⑫ 「かもしれない」：推量形式によって示される判断
- 【13】 「のだ」：「のだ」形式によって示される披瀝
- 【14】 「のである」：「のだ」形式によって示される披瀝

①から【14】で表されているのは、「(男)」の〈判断〉と〈披瀝〉である。可能形式、否定形式、推量形式が話者の〈判断〉という心的態度を示すことに異論を唱える人はいないだろう。一方、「のだ」の機能については諸説あるが、ここでの機能は「(男)」による〈披瀝〉である。披瀝とは、「話し手の内心や体験、個人的な事情といった、聞き手には容易に知り得ない種類のことがらを告白するような気持ちで表明するときしばしば用いられる」(田野村：1990) 心情である。このような登場人物の視座からの〈判断〉や〈披瀝〉の描写は、体験者をトラジェクター、刺激をランドマークとするトラジェクターとランドマークの関係

を反転させることによって表出する。

2.2 トラジェクターとランドマークの反転

体験者と刺激の関係を表すトラジェクターとランドマークの関係を、Langacker (2003) は図1を示して次のように説明している。

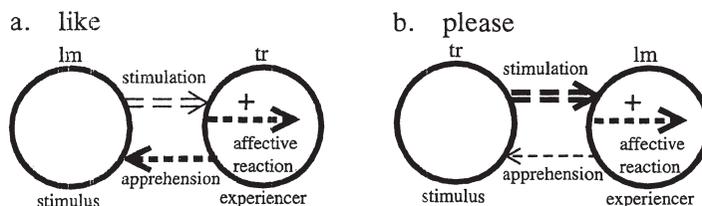


図1 体験者と刺激 (Langacker 2003: 49)

図1は‘like’/‘please’が見せるトラジェクターとランドマークの反転の例である。関係性を表す表現で本質的には同じ内容を誘発する表現の意味は、トラジェクターとランドマークの反転によって説明される。全体の関係性のなかで、どちらの参加者を焦点化するかが、より際立った側面を決定するのである。‘like’/‘please’は、どちらの概念基盤も刺激と体験者という二つの参加者から成り、その関係は、刺激が体験者に達すると体験者がそれを知覚したり感知し、積極的な反応をするというものである。‘like’がプロファイルするのは体験者であり、そのため、体験者がトラジェクターとして機能する。一方、‘please’は刺激をプロファイルするため、刺激がトラジェクターとして機能する。

このようなトラジェクターとランドマークの反転は、日本語では「見る」/「見える」の関係のなかで説明すると分かりやすいだろう。体験者と刺激との相互作用の中で、「見る」は体験者の役割を焦点化するため、体験者がトラジェクターとして機能する。一方、「見える」は「自然に目にうつる。目に入る」(『広辞苑第五版』)とあるように、外からの刺激が焦点化され、その刺激を体験者が受け手となって受容することを意味する。そのため、刺激がトラジェクター、体験者がランドマークとなって機能する。このことから、「見える」が反映するトラジェクターとランドマークの反転は、‘please’が反映するトラジェクターとランドマークの反転と同一の認知プロセスであるといえる。

しかしながら、「見える」と‘please’とは大きく異なる点がある。それは、「見える」の場合はランドマークである体験者が言語化されないことである。ランドマークである認知主体が言語化されない「見える」の構図は、記述された状況を示す客体的概念内容のなかの動詞によってプロファイルされるプロセスのトラジェクターが、自分自身を取り込んで概念化

されている。話し手が自分自身を提示させないかたちで概念化しているのである。このような構図は、話し手が実際にそれを経験しているとして事態を把握する態度を反映するものであり、極めて主体的な事態解釈態度を反映する。

(01) の①から④の文は、このようなトラジェクターとランドマークの反転によって、登場人物を体験者とする〈判断〉や〈披瀝〉事態が表示されているのである。では、これらの文とトラジェクターとランドマークが反転していない文とでは、視点構成の観点からどのような差異があるのだろうか。

3 視点構成

3.1 視点用語

「視点」という用語は、周知のように実にさまざまな研究分野で使用される用語であり、かつ、その意味も多様に解釈されている。本章では、認知言語学のアプローチから、「視点」を「記述しようとする事態や状況を話者がどのような観点から観察し、とらえ、解釈するかという言語主体の認知的作用の一側面を指す」（谷口2007: iii）と定義する。

本稿では視点構成に関わる用語を表1のように整理する。表1のa-fは、本多（2005: 32）で提案されているa-eにfを加えたものである。

表1 視点構成の要素と用語

要素	用語
a. 見る主体：誰が見るのか	視点人物
b. 見られる客体（対象）：どこ（何）を見るのか	注視点
c. 見る場所：どこ（何）で見るのか、どこ（何）から見るのか	視座
d. 見える範囲：どこからどこまでが見えるのか	視野
e. 見える様子：その結果どのように見えるのか	見え
f. 視線の動き：見る主体が対象に向ける動的視線	パースペクティブ

視点構成は、「視点人物」「注視点」「視座」「視野」「見え」「パースペクティブ」の6つの要因から成る。「視点人物」とは見る行為主体であり、「注視点」とは視点人物の見る行為の対象を表す。「視座」とは視点人物の位置する場を意味し、「視野」とは見える範囲を示す。「見え」とは視点人物に映じる注視点の有り様、つまり、情況がどのように立ち現れるか、ないしは状況がどのように経験されるかである。また、「パースペクティブ」とは視点人物が注視点に向ける動的視線を意味する。なお、本稿では、これらの用語は、視覚に限らずあらゆる知覚および認知のシステムに適用できる用語として用いる。

察者として、視覚状況のなかで非対称的に機能する場合である。他方、参加者が客体的に解釈されるのは、背景からも観察者からも明確に区別され、くっきりとした輪郭を持った観察対象として際立ちを帯びた場合である。そのため、完全に客体的であるには、参加者は知覚的に最適な領域に位置づけられ、明確化されていなければならない。普通、それは観察者に近い（しかし、直に接しているわけではない）位置である。この領域（a）の破線の円を客体的領域という。客体的領域は、視覚状況において第一義的に注意が向けられる領域である。ステージモデルでいえば、客体的領域はオンステージ領域に当たる。ステージ上の俳優は、聴衆席にいる観察者によって完全に客体的に見られている。一方、これらの観察者たちは完全に演劇に夢中になっている、つまり自己の気付きを全く消失している限りにおいて、見るという行為の過程における彼ら自身の関与の仕方は、最高に主体的であるといえるのである。

自己中心的視点構成は標準的視点構成と対照を成す。知覚体験に関連して領域が立ち現れるのはどちらの視点構成の場合も同一であるが、両者の異なりは客体的領域の範囲にある。標準的視点構成では、観察者はその外側に位置し、最高の知覚状況となる領域が設定される。この領域が客体的領域となる。これとは対照的に、自己中心的視点構成は、人が自分自身の中や、自分の周りの参加者との関連の中で持つ自分の内部から湧き起こるような関心を説明する。そのため、注意が払われる場合は、最高の知覚状況の範囲を超え、視覚者の位置や、そのすぐ近くのものを含むことになる。そのため、観察者はより拡大した客体的領域のなかに位置することとなる。つまり、観察者もオンステージ領域に存在しているのである。このことは、観察者が、もはやたんに観察者ではなく、ある意味では客体的対象になっているという事実を反映している。それ故、観察者の自己意識では主体的と客体的区別が曖昧となっている。

3.3 視点構成を反映する日本語の時制形式

タ形、ル形は時制形式と呼ばれている。「時制」という名称が示すように、時制形式は一般には発話時に関連づけられた出来事の時間的位置を意味するとされている。たしかに時制形式には時制を表す機能があるといえる²⁾。しかし、日常の言語行為においては、時制形式の意味に、時制では説明できない振る舞いも多々見られることも事実である。

時間と認識判断の相関関係について、Langacker (2008: 300) は次のように述べている。「われわれが世界を経験するのは一瞬、一瞬の連続としてであることから、直接アクセス可能なのは現在の瞬間のみである。過去はもはや直接経験することはできず、回想を通してのみ経験される。そして、未来は間接的にさえも経験されることはあり得ない。われわれは企図するか、推測するか、想像することだけしかできないのである。こういった本源的なやり

方のなかで、現在に関連づけられた時間的位置と共存して、出来事を確証する程度が決定される。ある時点において、われわれが過去と呼ぶ現実には既に輪郭³⁾がはっきりしており、現在は輪郭づけをしているところであり、未来は未だ輪郭をなしていない。」

このような時間と認識判断の相関関係⁴⁾から捉えると、日本語の時制形式の意味は [時間] [実在判断] [心的距離] という3つのドメイン⁵⁾から成るマトリックスであるといえる。言葉の意味には、概念内容とその概念内容の解釈の両方が含まれており、認知文法では、概念内容に言及する方法としてドメイン (domain) という用語を用いる。言語表現は、意味の基盤として (すなわち解釈される概念内容として) ひとまとまりの認知ドメインを喚起する。このひとまとまりのドメインの集合体をマトリックス (matrix) と呼ぶ。大半の言語表現ではマトリックスは多数のドメインで構成されている。

マトリックス内には際立ちのあるドメインがあり、具体事例は主にそのドメインに存在すると考えられる。[時間] [実在判断] [心的距離] のドメインから成る時制形式の場合、日常の言語行為における振る舞いでは主に [時間] ドメインが際立ちを帯びることから〈時制〉が表出する。一方、〈時制〉では説明できない機能がはたらく場合には [心的距離] [実在判断] ドメインが際立ちを帯びる。この場合には、両者の際立ちにより、視点人物が注視点を [実在判断] する判断の仕方と、その判断の際に視点人物が注視点を据え置く [心的距離] とが表出する。

さて、そこで、時制形式と3ドメインとの関係を明らかにしたいと思う⁶⁾。まず、[実在判断] について考えると、主体が対象にプロセスを認識するか否かが識別の要因となる。対象を認識する際にプロセスをプロファイルすることを「プロセス」、対象を認識する際にプロセスをプロファイルしないことを「 ϕ プロセス」とする。品詞別にみても、「 ϕ プロセス」には「ある」「いる」「要る」の3つの動詞と知覚自動詞 (「見える」「聞こえる」「匂いがする」等)、助動詞、形容詞が該当し、「プロセス」には「 ϕ プロセス」に該当しない動詞 (瞬間動詞も「瞬間」というプロセスをプロファイルするとみなす) が該当する。

このような「プロセス」「 ϕ プロセス」の別に、[心的距離] を表示する、「ル」、「テイル」、「タ」、「テイタ」という形式が組み合わされ、「プロセス/ル」「プロセス/テイル」「 ϕ プロセス/ル」「プロセス/タ」「プロセス/テイタ」「 ϕ プロセス/タ」の6種類の組み合わせが日本語の時制形式として表出する。たとえば、プロセスをプロファイルする〈読む〉は、「プロセス/ル」、「プロセス/テイル」、「プロセス/タ」、「プロセス/タイタ」の3形式を備え、「読む」、「読んでいる」、「読んだ」、「読んでいた」として表出する。一方、プロセスをプロファイルしない〈ある〉は、「 ϕ プロセス/ル」、「 ϕ プロセス/タ」の2形式を備え、「ある」、「あった」として表出する。日本語の時制形式を表2に示す。

語り方の視点構成

表2 日本語の時制形式

プロセス／テイル	φプロセス／ル
プロセス／タ, プロセス／テイタ	φプロセス／タ
プロセス／ル	

- 〔 ・プロセス：動詞
 ・φプロセス：動詞（「ある」「いる」「要る」、知覚自動詞（「見える」「聞こえる」
 「匂いがする」等）、助動詞（含 形容動詞）、形容詞） 〕

日本語の時制形式である6形式と〔時間〕〔实在判断〕〔心的距離〕ドメインとの相関関係を示したものが表3である。表3にある〔時間〕ドメインがプロファイルされると時制の意味が際立ちを帯びる。日常の言語行為で意識されるのはこの際立ちである。一方、語りではこの〔時間〕ドメインを排除した〔实在判断〕〔心的距離〕ドメインが際立ちを帯びる。〔心的距離〕とは、視点人物が注視点である対象を〔实在判断〕する際に、自己と対象とのあいだに認識する距離である。プロセス／タ、φプロセス／タともに〈遠隔・实在判断〉、プロセス／テイタは〈遠隔同位置・实在判断〉を反映する。〈遠隔同位置・实在判断〉とは、主体が視座を一旦遠隔に据え、その位置から対象が同位置に实在すると判断することである。一方、プロセス／テイルは〈直接同位置・实在判断〉、プロセス／ルは〈乖離・实在非判断〉、φプロセス／ルは〈直接同位置・实在判断〉を反映する。

このような、〔实在判断〕と〔心的距離〕との相関関係を構築するのが視点構成である。プロセス／タ、φプロセス／タ、プロセス／テイタの3形式で言語化される関係、すなわち、認知主体が与えられた事態を外側から距離を置いて、〈遠隔〉から対象事態の〈实在判断〉をする構図は、標準的視点構成の反映である。一方、プロセス／テイル、φプロセス／ルの2形式で言語化される関係、すなわち、認知主体が問題の事態の中に自分自身を投入し、事態と自己とが〈同位置〉にあるとして対象事態の〈实在判断〉をする構図は、自己中心的視点構成の反映である。そして、プロセス／ル形式は〈实在判断〉に関与しないことから、これら2種類の視点構成のどちらをも反映しないことになる。以上述べてきた、形式・ドメイン・視点構成の関係を示したものが表3である。

表3 形式・ドメイン・視点構成

形式		ドメイン・視点構成		ドメイン			視点構成
				時 間	実在判断	心的距離	
タ	プロセス	過 去	判 断	遠 隔	標準的視点構成		
	φプロセス	過 去	判 断	遠 隔			
テイタ	プロセス	過 去	判 断	遠隔同位置			
ル	プロセス	未 来	非 判 断	乖 離		自己中心的 視点構成	
	φプロセス	現 在	判 断	直接同位置			
テイル	プロセス	現 在	判 断	直接同位置			

4 内的独白文の視点構成

内的独白文は、言語主体の事態把握の観点から捉えると、トラジェクターとランドマークの反転を反映している。体験者である言語主体が言語化するのは〈判断〉や〈披瀝〉といった心的態度であり、言語主体は、客体的概念内容のなかの動詞によってプロセスされるプロセスのトラジェクターとしての役割を放棄し、自分自身を提示させないランドマークとなっている。このような、言語化されない体験主体をランドマークとし、その思考内容をトラジェクターにすることにより、体験主体が体験を極めて主体的に概念化する構図を構築するのが自己中心的視点構成である。体験者である観察者も対象と同じようにオンステージ領域に存在し、自分自身のウチ側や自分の周りの参与者との関連のなかで、自分の内部から湧き起こるような関心を説明する。そして、こうした自己中心視点構成を、時制形式とされる「φプロセス/ル」「プロセス/テイル」という2つの言語形式が反映するのである。

5 おわりに

最後に、本稿の考察結果を英語訳と比較し、そこから考えられる今後の課題について述べたい。(02)は(01)の英語訳である。

(02) He stood^① in the doorway and looked up at the sky. At last he could distinguish^② the red tints of the morning Sun. Small fleecy clouds ... not patterns that promised rain. It seemed^③ that with each breath he exhaled, his body lost more moisture. “What in God’s name do they think they’re doing? Do they want to kill me?” The woman continued to tremble^④ as usual. Perhaps it was^⑤ because she knew all about what was happening. After all, she was an accomplice who had assumed the stance of an aggrieved party^⑥. Let her suffer^⑦. It was

fitting retribution^⑧ for her to suffer like this.

But it would serve no purpose^⑨ if he didn't let the villagers know of her suffering. And there was no assurance that they would know about it^[10]. He knew very well^⑩ that, far from taking pity on her, they would sacrifice the woman without compunction if the need arose. Perhaps that was^⑪ the reason she was frightened. He was like an animal who final-ly sees that the crack in the fence it was trying to escape through is in reality merely the entrance to its cage—like a fish who at last realizes, after bumping its nose numberless times, that the glass of the goldfish bowl is a wall. For a second time he was flung down with no defense^[13]. Now the other side held the arms^[14]. (The Woman In The Dunes. International 1991: 123)

(02) に附した①から【14】の番号は、(01)の①から【14】の番号に対応する。それぞれの対応からは次の3点の異なりがみえる。

- [1] 英文では、①, 【10】, 【13】に動作主体である「He」が表出している。
- [2] ⑦以外のすべての文において、英文では過去形での表記となっている。
- [3] 英文には、原文の「のだ」形式に対応する形式が表出していない。

[1] からは、内的独白という内容でありながら、英文の①, 【10】, 【13】ではトラジェクターとランドマークの反転現象は起きていないことが分かる。[2] からは、日本語では、「φプロセス/ル」「プロセス/テイル」形式によってマークされていることから、事態が自己中心的視点構成によって解釈されていることが明かとされている。しかし、一方、英語では、いわゆる「過去形」の表記であることから、標準的視点構成による事態解釈であると考えられる。ここからは、内的独白文を表出する際の日本語と英語での視点構成の異なりがみられる。

しかし、英語でも⑦のように非過去で表されることもあり、その場合は、自由間接話法とされる。「英語の自由間接話法は日本語に訳されるさいにすくなくならず論議を呼ぶ形式である。ひとつには日本語にはこれに対応する形式がないからである。」と、中川(1983: 201)によって指摘されて久しいが、現在も未だ自由間接話法と日本語の話法との関係についての研究はすすんでいない。視点構成の観点からの考察による両者の関係の解明を今後の課題としたい。最後に [3] からは、日本語の「のだ」形式の備える特殊性がみられる。(02)に限らず一般に、「のだ」形式が英訳されることはない。にもかかわらず、内的独白文に表出する「のだ」形式の頻度は高い。この点についても、視点構成の観点からの考察を今後の課題としたい。

注

- 1) ある事態の解釈には、その事態を解釈する概念化の主体 (subject of conceptualization) とそれによって解釈される概念化の対象 (object of conceptualization) という2つの異なる役割を持つ〈存在〉が存在する。これら2つの〈存在〉を結びつけること、つまり、グラウンドに言語表現を結びつけることをグラウンディングという。したがって、視点構成の問題はグラウンディングの問題でもある。
- 2) しかし、実際には時制の名称と形式との意味は合致せず、齟齬をきたしている。例えば、現在形と言われる「読む」は実際には〈未来〉を表し、〈現在〉は「読んでいる」というテイル形式によって表される。また過去形とされる「読んだ」は、「読んだ後で、……」では〈未来〉を意味する。
- 3) ここで用いられている「輪郭」という用語は、3.2で使用されている「輪郭」と同義であり、時制形式の意味と視点構成の共通項として作用する。
- 4) 山田孝雄 (1907) 「文法上の時の論」『日本文法論』では「現在過去未来などいふ区別は果たして実在するものなりや。時間といふ概念の起原如何等これ最初に討究せらるべき問題なり。」として、時間の認識論が論じられている。また、細江逸紀 (1973) 『動詞時制の研究』では、「時制」に伴う確実性の差異が論じられている。また、山本 (2008, 2013) では、認知言語学のアプローチにより時制形式の意味を考察している。
- 5) ドメインの詳細については、Langacker (2008: 44-54) 参照。
- 6) 《語り》を構成する時制形式の意味について、時制・アスペクトの機能から説明する論は山岡 (2001), 工藤 (1995), 益岡 (1991) など多数見受けられる。一方、「日本語のこのような具体例について見ると、もちろん西欧の伝統的な「歴史的現在」の概念でもって一応説明できる場合もある。しかも、必ずしも「歴史的現在」という概念では処理できないようなやり方で、多く起こっているという指摘がしばしばなされる。」(池上1986) というように、時制概念との関わりで説明しようとする姿勢に問題提起をする諸説も、野口 (1994), 藤井貞和 (2004) 等々に見られる。

参考文献

- 池上嘉彦 1986. 「日本語の語りテキストにおける時制の転換について」『記号学研究6』日本記号学会.
- 工藤真由美 1995. 『アスペクト・テンス体系とテキスト：現代日本語の時間表現』ひつじ書房.
- 谷口一美 2005. 『事態概念の記号化に関わる認知言語学的研究』ひつじ書房.
- 田野村忠温 1990. 『「のだ」の意味と用法』和泉書院.
- 中川ゆきこ 1983. 『自由間接話法』あぼろん社.
- 野田春美 1997. 『「の(だ)」の機能』くろしお出版.
- 藤井貞和 2004. 『物語理論講義』東京大学出版会.
- 細江逸紀 1973. 『動詞時制の研究』篠崎書林.
- 本多啓 2005. 『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会.

- 益岡隆志 1991. 『モダリティの文法』 くろしお出版.
- 山岡實 2001. 『「語り」の記号論』 松柏社.
- 山田孝雄 1907. 『日本文法論』 宝文館出版.
- 山本雅子 2008. 「テイルの認知的意味」『言葉と認知のメカニズム』 ひつじ書房.
- 2013. 「日本語時制形式の意味：実在判断」『言語の創発と身体性』 ひつじ書房.
- Langacker, Ronald W. 1985. Observation and speculations on subjectivity. In *Iconicity in syntax*. ed. John Haiman, 109–50. Amsterdam: John Benjamins.
- . 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, Volume 2. Stanford: Stanford University Press.
- . 1993. “Reference-point Constructions,” *Cognitive Linguistics* Vol. 4, No. 1, pp. 1–38.
- . 2003. Constructions in cognitive grammar. *English Linguistics* 20 (1): 41–83.
- . 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.